

## 「3・11」と再生可能エネルギー

2012年3月17~18日に開催された「第29回日本環境会議島根大会」のことが思い起こされる。写真上は大会討論で発言する原田正純先生。水俣で起こったこと以上に、福島原発事故は深刻な被害をもたらすと警告した。先生はそれからまもなく、6月11日に亡くなった。



大会では、長谷川公一・東北大学教授が「福島原発事故から学ぶ脱原子力社会」、ミランダ・A. シュラーズ・ベルリン自由大学教授が「なぜドイツでは脱原発を決定できたのか」と題して特別講演した。

ミランダさんの岩波ブックレット『ドイツは脱原発を選んだ』2011年9月を読んでいたため、とりわけミランダ講演は印象に残った。「やればできる脱原発—なぜドイツには可能だったのか、そして再生可能エネルギーへの転換は可能か」と問いかけた。ブックレット「おわりに」さいごから。



「アメリカ人である私は、かつて日本に留学し、現在はドイツに住んでいるが、ドイツも日本も外から相対化して見ている。ドイツ人が日本についてまず疑問に思うのは、広島と長崎に原爆を落とされたにもかかわらず、どうしてこれほどたくさんの原発を持っているのか、ということである。これはドイツ人にはどうも理解できない。二つめは、日本は地震の多い国であるにもかかわらず、なぜ原発をつくったのか、ということだ。

一方、アメリカ人の立場からドイツを見ると、やはり持続可能な発展を追求していると思う。理想というものが、ドイツの文化にはある。自然を守ることが倫理となっている。日本には理想がないとは思わないが、企業が利益を追求する力が非常に強く、理想の力を弱めているのではないだろうか。まるで、政治を動かしているのは企業であるかのようだ。東日本大震災後のいまこそ、政治に倫理を導入することが求められているのではないだろうか。」

ECOまちネットワーク・よどがわ総会記念上映会で「日本と再生 光と風のギガワット作戦」を観た。「日本と原発」につづく、弁護士の河合弘之監督の最新作映画。日本と世界の自然エネルギーの風力発電、太陽光発電などの現状などを、現地調査にもとづいて明らかにする。ミランダさんはブックレットで、ヨーロッパを再生可能エネルギーの「大陸」と述べていたが、その現実を知ることができた。政治に倫理を導入し、「3・11」から学んでいかねばならない。



(2018年3月10日)